

## 島木健作と堀坂山行：新資料島木健作（梅川文男宛）葉書三枚から

著者	尾西 康充
雑誌名	三重大学日本語学文学
巻	17
ページ	59-72
発行年	2006-06-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10076/6635">http://hdl.handle.net/10076/6635</a>

# 島木健作と堀坂山行

——新資料島木健作（梅川文男宛）葉書三枚から——

尾西 康充

二〇〇六年四月九日は戦後三重県議を二期二年、松阪市長を三期一年務めた梅川文男の生誕一〇〇年に当たる日であった。これに合わせて田村元衆議院議長が実行委員長となった記念展が松阪市文化財センター第三ギャラリーで四月一日から一三日まで開催された。連日約八〇名が会場を訪れ、入場者数は合計一、二〇〇名に上った。実行委員のメンバー高岡庸治（元本居宣長記念館長）梅川悠一郎（元松阪市立図書館長）梅川紀彦（二科会写真部）の三氏と私とが出席した座談会「梅川文男を語る」が地元の有力紙夕刊三重に五回にわたって連載され、さらに記念展の内容が同紙に毎日大きく宣伝された効果も大きかったが、私が何より感じたのは「人間梅川」というキャッチフレーズを掲げて選挙を勝ち抜いた梅川が今もなお市民から広く慕われていることであつた。来場者のなかには何度も会場に足を運んで熱心に展示物を見学する人や写真を観て往時を追憶し

涙ぐむ人もいた。

全国の市町村長は数知れぬほど多いが、没後約四〇年を経てこのように市民に迎えられる市長は他にいないだろう。現代の行政のリーダーは、どれほど企業を誘致し建物や道路を新設するかという経済面の施策を優先させて考えることが多い。それに対して梅川は市内に残る差別と闘うと同時に、郷土の文化を尊重するという精神面での施策を重視した。それらを具体的に挙げれば、一九六三年松阪市制三〇周年記念事業として①市内の被差別部落の実態調査を部落問題研究所に委託し、『都市部落』『農村部落』を刊行して同和行政を推進する基礎資料とした、②市内の伝統習俗を写真と随想で紹介した写真集『松阪』を刊行し、郷土の文化を尊重する意識を育てた、③戦没兵士の手紙集『ふるさとの風や』を編集して市内の戦没者を追悼し、それを教育機関で頒布することによって平和の大切さを教えた。さらに翌年、三重県解放運動無名戦士の碑を篠田山墓苑に建立し

一四三柱を合祀し彼らの功績を称えた。戦後日本が高度経済成長を遂げ市民の多くが好景氣に心を奪われて、国の内外で無辜の人間が生命を奪われた歴史を忘却してしまった。梅川市政の底流には、一人ひとりのかけがえのない生命を尊ぶという精神が存し、大多数の市民が彼に信頼を寄せたのである。

このような精神は梅川が代用教員時代に形成され、解放運動に従事するプロセスで強靱なものに鍛えられていったものと考えられる。私は彼が他者に共感する力という文学の創作には不可欠な素質を多分に備えていたことを重視し、文学者としての梅川の側面に注目したい。戦前は囑託の保護司として梅川の思想犯保護観察を担当した庄司桂一によれば、梅川は「政治より文筆の方が本領で、政治家は不向きだったと思う。周囲が誤ったので政治が彼の生命を縮めたし、市長の激職が長過ぎた」と回顧している(1)。庄司は弁護士資格を持ち安濃津地方裁判所所属の公証人を務め、梅川とは一九三六年頃、松阪市内で本を交換する読書会で知り合った。梅川が平生町に古書店を出す際に思想犯の更生を支援していた明德会から一、〇〇〇円出資させたという。解放運動に理解が深い人間で人望も厚く戦後公選初の松阪市長に選ばれた。梅川には終世変わらぬ援助を与え続けた庄司の「周囲が誤ったので政治が彼の生命を縮めた」という言葉は、傾聴すべき内容を含んでいると思われる。

## 2

梅川文男の遺品を集めた展示は初めてのことで、オープン当初は展示品が揃わず展示方法も整わない状態であったが、日を追う毎に次第に改善されていった。抜群のセンスを駆使してギャラリーの展示をプロデュースした梅川紀彦氏は文男の甥で、かつて「梅川旅館」と呼ばれ県内の活動家が集まって会議を開いたといわれる松阪市新町九〇一番地の文男自宅跡で写真スタジオを営んでいる。当時の家は築一六〇年、老朽化が進んでいたので紀彦氏がセントラル硝子を退職してプロのカメラマンとして独立した際に取り壊された。そのとき古い家財道具はまとめて段ボール箱に入れて屋根裏部屋に押し込んだというのだが、今回初めて記念展の準備のためにそれらを取り出して開封してみると、埃まみれの中から梅川文男に関する貴重な遺品が

沢山出てきたのである。新たに発見された梅川の妻きよ宛書簡四通によれば、太平洋戦争開戦時の非常措置事件に際して治安維持法違反の容疑で安濃津地方裁判所で二年六ヶ月の実刑判決を受けたこと、一審判決後転向を認めて上訴権抛棄申立書を提出して名古屋刑務所に下獄し、一九四四年五月二八日に出獄したことなど、これまで漠然としか分からなかった経緯の詳細が明らかになった。やはり今回発見された河合秀夫のきよ宛書簡によれば、自分は「悪くても執行猶予はつくと思じて」いたが「こんな時勢のため運が悪いのです」。しかし「控訴して争ふのも保釈をきかさねば時間がおくれるだけですから残

念でも服罪して早く出てきて貰った方がよいかもわかりません」と助言している(2)。梅川は三・一五事件の際には五年の実刑判決に非転向を貫いて服役したが、今回の非常措置事件は一九四一年三月に治安維持法が改悪されて予防拘禁制度が導入されており、しかも太平洋戦争開戦によって「思想国防体制の構築」が強化されていたために(3)、執行猶予も付かない一審判決を見て服罪もやむを得ないと判断したのだろう。

ところで朝日新聞社の平尾敦史記者の取材によれば、三重刑務所で長年看守を務めた深草久郎は、太平洋戦争開戦の翌年に梅川が未決囚として勾留されていたときのエピソードを覚えていた。「三十代半ば、背が高くやせ、学者風だった」梅川を三重刑務所から約一キロ離れた安濃津地方裁判所に連れて行き、検事による取り調べを受けさせた。「この聖戦を帝国主義戦争というのか」と検事が詰問すると、梅川はすかさず「他国の領土に攻め入るのは、侵略戦争です」と反論、いきり立った検事は席を立てて尋問を中止した。控室に戻ってたしなめると梅川は「当然ですやろ」と一言、ただならぬ信念が感じられたという(4)。

このエピソードからは、「司法処分の過酷化」を進めていた思想検察に対して梅川が最後まで抵抗を試みていたことが分かる。

このように新たな発見によって非常措置事件の経緯が明らかになったのだが、それ以上に貴重な発見となったのは島木健作の梅川文男宛葉書が三枚見つかったことである。日本農民組合(日農)香川県連合会書記の朝倉菊雄と同淡路連合

会書記の梅川とは旧知の間柄であっただけではなく、三・一五事件で下獄した大阪刑務所では斜め向かいの独房で服役していた。非転向を貫き五年の刑期を終えて一九三三年二月に大阪刑務所から出獄した梅川は、ナウカ社から創刊された「文学評論」(一九三四年四月号)を手にし、肺患のために仮釈放で出獄していた朝倉が島木健作のペンネームを使って自己の獄中生活を描いた小説「癩」を偶然目にする。梅川によれば「くいつく様によみながら、ぶる／＼興奮」し、「これは『戦旗』時代の数多くの『プロレタリア』小説とちがつて、ほんものだと唸った。読み終つて、ふつふつと湧き上ってくる興奮のはけ口にこまつた」という。このエピソードを伝えているのは「島木健作の思い出―『癩』のもでるなど」(『季刊関西派』創刊号、一九四九年七月、竹書房)という随想で、梅川は島木の作品に対する深い共感から文学作品の創作の筆を執ることになる。さらに梅川は同じ随想のなかで次のように打ち明けている。

こうゆうような事情のなかで、それは「癩」の登載された文学評論が出るすこし前のこと、私は、ひまを作つてKさんのいる静岡市にゆき、一週間ほど滞在した。静岡につくなり私は、全会派の中央部から、口説き役が来ること。

その口説き役が他ならぬ朝倉菊雄であることをきかされた朝倉君なら懐しい。要件はともかくとして、ゆつくり懇談してみよう、と待った。

朝倉菊雄は、実兄の経営する赤門前の、社会科学書専門の古本屋、島崎書院にいて商売を手伝っているとのことだつた。

こゝではじめて私は、彼が、その深度は別として、全会派の仕事に秘密に参加していることを知った。そして彼が参加している位なら全会派の中央部は充分信用してもよいと考えた。ところが待つていた彼は来なくて、他の同志が来た。朝倉君は、また咯血して、寝ているとのことだつた。私はがっかりした。

引用文中、Kさんとは河合秀夫のこと、全会派とは全国農民組合の左派グループ全国会議派のことで、右派の総本部派と内部抗争を展開しており、河合は一九三一年右派のクーデターで総本部書記を解任され静岡に一時逃避していた。「癪」が掲載されたのは「文学評論」(一九三四年四月号)であるが、梅川は自分が出獄した直後に発表されたと勘違いしており、右の件は梅川が出獄した一九三三年二月から四月にかけてのできごとであったと考えるのが妥当である。当時島木は「ふたたび何等かの形で農民のなかで生活し、自ら行ふことによつて問題の解決の道を知るほか方法はないという思ひが強くなつて行つた」ようだが、身の危険を承知でどの程度運動に復帰し関与していたのかは分からない。しかし『インター』——第三インターナショナルの機関誌の異称——を日本で受取り、或る党員に届ける役をもつていたのだが、その事がバレ、本富士署に逮捕されて、

ヒドイ拷問に会つた」とされ、それ以来党との連絡を絶つたという証言がある(6)。また宮内男によれば、一九三三年春ごろから島木が全農全会派の機関誌「農民新聞」の編集を手伝うようになつており、同年六月から八月にかけて全農全会派中央フランク全員で地方県連に出張する計画を立てていたという(7)。このとき島木は本当に梅川に接触しようとしていたのかも知れないのだが、党内に潜入していたスパイが策略を仕組んでいたという疑いもある。肝胆相照らす仲であつた大山峻峰は梅川の死後、夕刊三重が企画した追悼特集に「あのとき、あの頃」という記事を寄稿している。

彼は日本農民組合のなかで、文章のうまさでは島木健作と並び称せられていた。島木とも友人で、三・一五事件の刑を終えて一ヶ月程、静岡の私の妻の父河合秀夫さんの家にいたことがある。そこへ島木がくるという連絡があつた。ところが彼は香川で咯血して倒れたため、この会見は実現しなかつた。彼と逢つていたらならば、梅川さんの人生行路も変わつていたことであらう。

いつかこの偶然について、彼自身「専門の作家になつたか、コミニストとして獄死していたかいずれかであつたらう」と、語つたことがある。人生は計りがたく至妙なものといわねばならない(8)。

大山もこのできごとを一九三三年二月から四月にかけて発生したと考えている。もしあのとき島木に会つていたらその後

の生涯は大きく変わっただろうと梅川が話したという。島木から受けていた影響がよほど大きかったことが推し量られるエピソードであり、今回葉書三枚が発見されたことによって両者は出獄後もたびたび手簡を取り交わすような親密な関係が続いていたことが分かる。

### 3

さてその葉書を次に紹介しよう。消印の年月日に従って列挙すれば、一枚目の葉書は一九三四年九月一七日の消印がある。官製はがきで、表裏共に黒色ペンで自書されている。

#### (表)

昭和九年九月一七日 三重県松阪市新町 梅川文男様  
東京市本郷区赤門前島崎方 一七日 朝倉菊雄

#### (裏)

東京市豊島区池袋町二ノ一二四三  
藤森成吉氏  
芝区新桜田町一九 山崎今朝弥氏  
です。今日は要件のみ。

島木は当時、本郷赤門停留所前に古書店島崎書院を経営していた実兄八郎宅に寄寓して店を手伝い、東京帝大の教師や学生相手に「博覧強記の名番頭」であつたという(9)。この葉書は梅川に全日本無産者芸術連盟(ナツプ)の初代委員長藤

森成吉や左翼弁護士山崎今朝弥の連絡先を教えている。梅川はこの頃雑誌「詩精神」の同人として堀坂山行という筆名を使って詩や小説、評論を投稿していた。島木に紹介してもらって彼らに自分の作品を読ませようとしていたと推測される。大山の回想によれば藤森は同誌(一九三四年一〇月号)に発表された小説「酒」を高く評価したという(10)。

次に二通目の葉書は一九三六年六月一六日の消印のある絵はがきで、表は黒色ペンで自書され裏は絵と文字が印刷されている。

#### (表)

昭和十一年六月一六日 松阪市平生町 梅川文男様  
東京市世田谷区世田谷式の二、〇二四 16日 島木生

先日は御手紙ありがとうございました。いろいろ御批評感謝いたします。小生にとつては玄人の批評よりも素人の同志の批評の方がありがたくためになるやうです。古いところを書き切らないと新しいところが書けぬような気持でゐます。宮井君、香川でじつくり働いてゐるのでじつにじつに敬服してゐます。彼のことを書きたいと思つてゐます。

#### (裏)

「鞍馬道雨後」近藤浩一氏筆 日本美術院第十一回展覽  
会出品

今回発見された葉書のなかで右は最も重要な意味を持つもの

である。「宮井」とは宮井進一、島木にとって農民解放運動の第一義の道を生きる「インテリゲンチヤ出の運動家―典型的な、本当の意味の階級的英雄」で、島木の作品に登場する非転向の活動家のモデルであった（11）。宮井は早稲田大学商学部在学中から建設者同盟に加わり、卒業後は日農香川県連合会に転じて書記を務めていた。島木が仙台での学業を捨てて香川に来るようになったのは、宮井が「中央に信念的な農村活動家を求め、その推薦を頼んでおいたから」であつたという（12）。一九二八年二月二〇日、普通選挙法にもとづく最初の総選挙に際して「委員長は絶対に落選させられない」という労働農民党中央の意向に従つて大山郁夫を香川選挙区から擁立した。しかしその方針に異議を唱える一般農民が続出、さらに目に余るような選挙干渉がなされ敗北、宮井と朝倉は暴圧選挙批判演説会に赴くところ選挙違反の濡れ衣を着せられて私服刑事に検束された。日本共産党の党籍を得ていたために、引き続き発生した三・一五事件に重なるて起訴され、大阪地方裁判所の一審判決では両名とも五年の実刑判決を受けた。

右の葉書を投函した当時、島木は初めての長編小説「再建」を執筆している最中で、そのときの感想を「農民組合にゐる古い仲間なども忙しいなかをよく読んで激励してくれるので頑張らねばなるまいと思つてゐる」と語つて、梅川のような日農書記時代の旧友から励ましてもらつてゐることに感謝した（13）。

「再建」はナウカ社から発行されていた雑誌「社会評論」第一

巻九号（一九三五年一月）から第二巻七号（一九三六年七月）まで八回にわたつて連載されるのだが、同誌廃刊によつて一時中断される。後の部分を補足した形で一九三七年六月に単行本『再建』が中央公論社から出版される。島木によれば『再建』は「私の過去のすべてを打ち込んだ作品」で（14）、表現に苦慮しながら原稿用紙一、一〇〇余枚をほとんど伏字なしで完成させた小説であつたにもかかわらず、発売後一〇日で発禁処分を受けてしまふ。前年五月に思想犯保護観察法が施行されており、この厳しい処分は島木にとつて「日常の行動の一挙一投足にもその法律を感じ、悪夢を見るやうな気持」を深めさせるべきことになつた（15）。しかし彼は「禁止処分を受けたといふことよりも、この作品の第二部で、主人公の出獄後の生活において、転向問題が、正面から取り上げられる筈であつたのに、その機を失つたことを残念に思つた」という（16）。これが梅川に宛てた葉書の「古いところを書き切らないと新しいところが書けぬような気持でゐます」という言葉に符合する部分で、「再建」の主人公浅井信吉が獄中非転向を貫く「第一部」が「古いところ」に当たり、他方「出獄後の生活」で生じた「転向問題」を正面から取り上げる「第二部」が「新しいところ」に当たると考えられる。島木は「再建」の連載を進めながら、自分にとつて最も難題であつた「転向問題」をいかに描ききるかという関心から離れることはなかつた。

肺を患つた宮井は、下獄する直前に「肺病で死んでたまるか。

健康になつて出て来る。今度は農民の間に、どつかと腰を据え、地についた党活動をやるよ」と島木に語つたという。この言葉通り高松刑務所から満期釈放された後、帰農して農民のなかで生活していた。それに対して島木は出獄後自分も帰農しようとしたが激烈な流行性感冒のために倒れてそれが果たせなかつた。その当時の心境を次のように語っている。

昭和八年 意志的に自分を訓練すること、過去の自分の足跡について考へることとの両方の目的から、『日本農民運動史』を書かうとして資料を集めにかかつた。やや準備成つて、書きにかかつたが転向問題が根柢にあり、それにひつかかつて幾らも書きすむことができなかった。ふたたび何等かの形で農民のなかで生活し、自ら行ふことによつて問題の解決の道を知るほか方法はないという思ひが強くなつて行つた。家の者には秘してその準備を進めつつあつた。十二月、激烈な流行性感冒のために倒る。

島木によれば自分の「転向問題」を解決するには農民のなかで生活し自力励行する以外に方法はない。しかし病軀のためにそれが実現できなくなつてしまつたという。宮井が「朝倉から、私の村や部落における生活記録を書いて送れと頼まれたのは、十年から十一年にかけての頃であつたと思う。私が忙しくて書き汲つてゐると、何回も手紙で催促をよこした」と回想しているように、島木は帰農していた宮井に新たな農村生活を報告してもらふという手段をとつた(17)。葉書の最後に「宮井君、

香川でじつくり働いてゐるのでじつにじつに敬服してゐます。彼のことが書きたいと思つてゐます」と記されていたのは、出獄後の宮井をモデルにした「再建」第二部が構想されていたことを意味する。

#### 4

ところでなぜ島木と梅川が手簡を取り交わしていたのか、あらためてこの問いを考へてみたい。島木は「読者の批評について」(「文学案内」、一九三五年八月)という一文で、文壇人による玄人批評と一般読者による素人批評とを区別し、「文壇人の批評は、結局プロレタリア文学の側の人でさへ、藝や技巧を中心とした批評をあまり出でないのに、読者はその作品のテーマそのもの、作家がその作品のなかでとりあげ解決しようとした問題そのものに、たゞちに喰ひついてくる」。そのような「プロレタリア文学の正しい生長を願ひ、その為にものをいつてくれる、まじめな読者の手紙」から多くのことを学ばされるという。

私が農民運動のオルグを主人公として、彼が処女地に手をつけようとしていろ／＼に苦心し、又は失敗したいきさつを小説に書いたとする。玄人はこの作品に対して、いろいろにいふだらう。古い。概念の露出がある。心理が充分に書けてない。筋書みたいところがあつて、充分に形象化されてゐない。等々。



素人も一応はさういふやうなことをいふ。しかし、まじめな、ことに勤労者である読者は、さらにその上に、そのオルグがなぜ失敗し、あるひは成功したか、といふ内容にまでつき進んで行き、オルグの大衆に対する働きかけ方が正しいか、まちがつてゐないかをまで問題にし、それにたいする作者の批判を通して作者自身の農民運動にたいする考へ方をまで鋭く突いてくるのである。

そして私などが読者の批評をもつとも珍重する所以はこゝにあるのだ。ある人々にとつては、さういふことは文学以前の問題で、大して重要なことではないかも知れぬ。しかし、作者がその作品のなかで、農民運動の一つの課題にたいし、文学的解決をあたへようとしたのである以上、その作品の批評も亦そこまでつつこんで行かなければ、文学批評として不十分なることをまぬがれぬのだ。

島木によれば、素人の批評は小説の描写に関する指摘にとどまらず、小説に登場するオルグの戦術の成否を問ひ、作者の農民運動に対する考え方を批判するところまで徹底される。具体的な戦術に即して農民運動を分析しようとするのは「文学以前の問題」に思われるかも知れないが、その敗北に対して「文学的解決」を与えようとした自分にとってこのような読者の批評は「珍重」されるべきものであるという(18)。右の一文で梅川が名指しされているわけではないが、彼のような日農書記時代の旧友たちから島木が作品評をもらつていたことが推察できる。

島木に宛てた書簡は一通も遺されていないので、梅川がどのような感想を書き送つていたのかは正確に分からない。しかし「癪」に強い感動を覚えたように「再建」にも強い共感を示していたと思われる。その証左となるのは「島木健作の思い出し『癪』のもでるなど」の次の一節である。

動きはじめた私のところに、中央部からこつそり使者が来た。上京して、中央部の仕事をしろ、とゆうのである。私は、こゝわつた。勇気をだしてこゝわつた。

体がまだ非常に疲れていること、三重の農民組織の再建をまずやらねばならぬから、と云うのが表面の理由であつた。

独座面壁、囚人と云うものは、記憶ばかりをくつて生きているものである。この様な渦巻く社会から隔絶された環境におかれた時にこそ、人はまつたく、云いわけや強がりをぬきにして、うぶな謙虚さをもつて、過去の自分にたちむかえるものである。私もまた、投獄されるまでの、自分のやり口を巨細に検討し、自己批判をつづけた。つづけながら、いかに機械的で、粗雑生硬なものであつたか、と顔を手で蔽いたく、又思はず赤面することもしばしばであつた。私は、この、ながい自己批判の成果の上に、どんと尻をおちつけて、農民組合運動をも一度やり直したかつた。

出獄して、見た運動はどうにも合点のゆきかねるふしぶしが多かつた。「池水涸れん」として魚躍る。」ていの狂躁さ

はともかくとして、大衆団体を、一つの党の私有物視し、外廓団体とすることには納得出来なかつた。これが上京をことわつた理由の一つであつた。それからまた、当時、共產党と云わず全会派といわず、中央部には、監視庁のスパイが潜入していて、あぶなくて、一週間ともたないだろうとも云われていた。上京することとは検挙されにゆくとうことだ、とも云われていた。スパイの張つたあみの上を泳がされている期間だけが無事なのだ、と極言するものもいた。事実、私より一年ほど先に五年ぶりで出獄し、家にとどまること数日にして上京し、組織に再び参加して一週間とたないうちに、また検挙された、とう同志もいた。疑心暗鬼、その頃、地方の中央部への不信の空気は可なりのものがあつた。

この文章が日本共産党所属の三重県議會議員時代に書かれたものであることを考えれば、梅川は驚くほど率直に党中央の誤謬を批判しているといえよう。梅川によれば大阪刑務所に服役中、日農書記時代の自分の行動が「いかに機械的で、粗雑生硬なものであつたか」を「自己批判」し、もう一度農民組合運動をやり直したいと考えた。だが出獄して帰郷してみると組合を「一つの党の私有物視し、外廓団体とすることには納得出来なかつた」という。全農左派の全会派に属していた三重県連は党中央の指示に従つて、小作人以外の農民層にも共有できる日常的なテーマを取り上げて多数の農民を動員するという農民委員

会運動を進めていたが、そのような大衆動員戦術は官憲の警戒を一層強めることになり一九三三年の三・一三事件をもたらした。梅川は被差別部落の同志と共にこの逆境に立ち向かい、極左的な運動の戦術転換をうながして合法面の運動を重んじるような組織を再建した。『日本農民運動史』によれば、右の経緯は次のように記述されている。

昭和八年の弾圧後の全農県連再建運動は兵庫淡路島より刑を終えて帰郷した梅川文男氏と日野町二丁目、東・西岸江、花岡の人びとによつて行われた。この当時すでに全農全国会議の高度な運動方針、行動綱領をもつて農民の日常闘争を革命的な方向に導き、貧農を革命的組織に結集するという方針は極左的偏向ではないか、それでは組織の大衆化は望めない、という意見が台頭し、このままではいたずらに犠牲を多くするというので全農復帰運動が起り、昭和九年（一九三四）全農第七回大会において大阪府連、奈良県連が、そして昭和一〇年には三重県連も総本部に復帰した。この年常任書記として元全国会議組織部責任者藤本忠良氏を迎え、つづいて、遠藤陽之助氏が奈良県連より送られ、書記局の体制は整備された（19）。

本来、組織は人が集まつて作られるものであり、この世に無謬の人が存在するはずのないことを考えれば、そこに誤謬が生じるのは不思議ではない。しかしひとたび組織が確立されると個人の総和を超えた組織の権威が発生し、それが個人の意思を

抑圧はしめる。梅川は五年間非転向を貫いたが、獄中生活を送るなかで組織に抑圧されて行動していた自己を批判し、出獄後農民組合運動に復帰すると党中央に対して批判的な態度で臨み、三重県連の運動方針を転換させた。被差別部落の同志が梅川の行動を支持していたとされ、信念にもとづく強い連帯感がそこにあつたと考えられる。このような一連の行動は観念の上で権威化された党中央に対する忠誠を否定し、運動の最前線に立っていた農民に対する誠実な態度からもたらされたものであり、党の「狂躁さ」とは裏腹に、大きく退潮する農民運動に真摯に向き合おうとした結果であつた。

## 5

梅川のように地方の農民組合で運動をしていた人間は程度の差こそあれ党中央に対する不信の念を抱いていた。島木と宮井は一九二八年二月に予定されていた普通選挙法にもとづく最初の総選挙に際して労働農民党委員長大山郁夫と同中央委員上山進を香川選挙区から立候補させることを党中央から指示された。前年九月の普選最初の県議会議員選挙では、全国有数二万の組合員を擁する日農香川県連は六名の候補者中四名当選、一名次点という好成績を収めた。地元の組合員から候補を選出しようと考えていた島木と宮井は「委員長は絶対に落とされないから、最も確実性の高い香川に決した」という党中央に対し翻意を求

めた。島木は全国選挙対策会議に香川代表として、会議に発つ二日前から発熱し病軀をおして出かけたが、「多勢でまくしたてられ、此方の言分まででんで問題としない」というありさまであつた(20)。目に余るような選挙干渉の結果、両名は落選するが、敗因は選挙干渉だけではなく地元の意思を無視した党中央の横暴にもあつた。島木の「一過程」(「中央公論」、一九三五年六月)は、このときの体験を素材にして描かれた小説である。総選挙に敗北した日農書記杉村は選挙報告の演説会の帰路、私服警官に検束された。本署留置場に移送されると同僚の書記小泉に偶然出会い、今回の検挙は単なる予備検束ではなく運動の弾圧を目的としたものであることを知らされる。杉村は目を凝らして鉄格子の向こうを見ると顔なじみの組合員たちが勾留されている。しかし「髭も髪ものび放題の憔悴し切つたその顔にいつかはつきり浮かびあがつてゐるものは、人をつきさす非難の色以外の何ものでもなかつた」。杉村は地元の組合員の意思を無視しただけでなくこのような弾圧を招いた責任を感じ、「彼らのあの眼なさしほどに今の杉村をぶちのめすものはない」と絶望させられるのであつた。

そもそも島木も地元の間人ではなく中央から派遣されたオルグであつた。生活を切りつめて苦学した自分の体験を踏まえて「農民の中で生活する」ということを、農民の代弁者となつていろいろなることを取り計らうという形で始めた。しかし杉村の目を通して描かれたように、島木の目の前に現れたのは「ぞろり

とした絹ものを着、太い帯に時計を巻きつけ、白足袋をはき、まるで商人の感じ」をさせ「言葉も標準語を器用に使う」農民たちであつた。そして「彼らの觀念によれば（農民組合の顧問）弁護士は文字どほり『お抱へ弁護士』であり、書記は会社の事務員にほかならなかつた。このような農民の姿は東北出身の島木にはおそらく想像し難いもので、農民の解放に献身しようとするという彼の「禁欲的理想主義」（小笠原克氏）を裏切るものであつた（21）。組織の再建のためには、階層分化が進み多様な顔を持つていた農民の姿を正しくとらえ、党中央と適切な距離を取りながら組織の再建を試みる必要があつた。

さきに島木が一九三三年当時の心境として「日本農民運動史」を「書きにかかつたが転向問題が根柢にあり、それにひつかかつて幾らも書きすすむことができなかった」と吐露していたことや、「再建」が発禁処分を受けて「この作品の第二部で、主人公の出獄後の生活において、転向問題が、正面から取り上げられる筈であつた」と残念に感じていたことを紹介した。終始こだわりながら思うように筆が進まなかつた「転向問題」とは、大久保典夫氏が島木は解党派に同調したとし森山重雄氏はそれを否定したが（22）、総選挙の敗北という自己の体験にもとづいた党中央に対する不信感を前提にしながら、農民の意思を裏切つて運動を敗北させた責任を意味する。島木が非転向の活動家を尊敬の念をもつて描いた「癩」をはじめとする一連の牢獄小説は一般読者の共感を集め、島木は一躍新進作家として注目さ

れるようになった。梅川のような地方の良心的な活動家も作品に共感すると同時に、党中央に対する批判も理解し合えていた。だが不屈の同志を讃えるだけでは島木の負い目の片面しか解消しない。もう一方には憤怒に燃えた「彼らのあの眼なざし」があり、それに応えなければ彼らを裏切つて敗北に導いた自分の責任に向き合うことにならない。島木は「再建」というタイトルに「単に組織の再建といふ以上に、広く深い人間的な意味合ひをこめたつもりであつたが、書かれた部分にはそれはまだ出てゐなかつた」という（23）。一度失墜した信頼をいかに取り戻せばよいのか、島木は控訴審で転向を表明しており非転向の宮井よりも一段と苦境に立たされている。大久保典夫は「私見によれば、島木は、転向作家中、おそらく唯一の責任倫理的思考の持主だつた」とする（24）。健康上の理由のために自ら運動に復帰することができず宮井からの報告に頼りながら小説を書き進めたが、主人公浅井が出獄して農民と言葉を交わす場面を描くまでには至らず、「再建」第二部はついに書かれずに終わった。

島木は潔癖な性格であつたため「彼らのあの眼なざし」に対する負い目を人一倍抱き続け、農民組合運動の再建という「文学以前の問題」に「広く深い人間的な意味合ひ」を託して「文学的解決をあたへようとした」。その結果、書かれなかつた「再建」第二部の代わりに、過剰なほど倫理的なモノローグが使われた「生活の探求」を創作し、帰農した人間の姿を描いた。し

かしそこに登場するのは島木の觀念が作り上げた農民の姿でしかなく、そのでつち上げに中野重治は怒りを露わにし、窪川鶴次郎は島木が「候補者の選挙演説の演壇を己の人生と心得てゐるのではないかとさへ思はれないことはない」と彼の場違いな態度を批判した(25)。島木の負い目の片面、「彼らのあの眼なさし」に対する信頼回復の責任は、過剰なほど倫理的なモノロークによつて觀念のなかで処理されようとした。森山重雄氏は「結局、島木は自己と異質の他者を描けなかったのではなからうか」とし、「生活の探求」から「新たな信念再生の物語」が開始されたように見えるが「真に他者の存在しない信念再生が、小説における本格的な自己劇化となりうるかどうかは疑問である」と指摘している(26)。自分に突きつけられた「彼らのあの眼なさし」、それは本来島木が自己を賭けるべき対象であつたにもかかわらず、信頼回復に向けたダイアローグはついに描かれずに終わつてしまつたのである。

## 6

二枚目の葉書に関する検討が長くなつてしまつたが、最後に三通目の葉書を紹介しておこう。一九三七年二月二十八日の消印のある官製ハガキで、表は黒色ペンで自書され裏は印刷である。

(表)

伊勢国松阪市平生町 梅川文男様

(裏)

移転御通知

此度左記へ転居致しましたから  
御通知申し上げます。

三月一日

神奈川県鎌倉町雪の下大倉六九〇番地

島木健作

国書版『島木健作全集』に収録された高橋春雄氏編「年譜」によれば、右の葉書が記された頃、「孤独の中に潜んで制作に没頭する」とある。一部雑誌発表済みであるが大部分を新たに加筆した最初の長編小説『再建』をこの年の六月に中央公論社から出版したことは、すでに触れた。梅川は雑誌掲載中からそれを読んでおり、単行本が出版されるとその感想を書き送つたことであろう。梅川も島木に刺激されて創作意欲を掻き立てられ、農民組合運動の再建に携わりながら多くの作品を発表している。記念展の準備をしていると、梅川のスクラップブックが新たに発見され、新聞に掲載された作品が切り抜かれてそこに貼り付けられていることが分かつた。「堀坂山行」以外にも「ぶろぐれ荘主人」や「冬目銀之助」、「冬目枕水」といったペンネームが使われ、地元の南勢新聞や伊勢新聞に詩や随想を発表、梅川はこれまで知られていた以上に創作に熱心であつた(27)。島木の

文学が地方の青年に与えた影響は非常に強く、松阪では詩人錦米次郎が梅川たちとの読書会を通じて「生活の探求」に接し、そのなかの「今の自分は一人の百姓である以外に何ものでもあらうとはしてゐない」という一文に強い影響を受け、自己を「百姓」として措定し農民詩を創作しはじめた。このように島木の文学は観念的と批判される一方で、地方の青年の心を激しく打って創作に向かわせる力を持っていたのであり、双方の観点を踏まえてその倫理的なモノローグの言説を分析する必要があるだろう。

註 島木健作の書簡発見は、朝日新聞津総局の高津祐典記者による「作風転換期の心の中つづる 転向文学の作家・島木健作」という記事で紹介された（『朝日新聞』名古屋本社版、二〇〇六年五月一日夕刊）。

- (1) 庄司桂一「梅川市長を偲ぶ」（『夕刊三重』、一九六八年四月五日）
- (2) 河合秀夫梅川きよ宛書簡（一九四三年五月一八日）
- (3) 荻野富士夫『思想検事』（二〇〇〇年九月、岩波新書）
- (4) 「三重の戦争 開戦五〇年」（『朝日新聞』、一九九一年二月二日）
- (5) 梅川文男「島木健作の思い出―『癩』のものである―」（『季刊関西派』創刊号、一九四九年七月、竹書房）
- (6) 宮井進一「島木健作と私 党および農民運動を背景として」（『現代文学序説』第四号、一九六六年五月、一三頁）
- (7) 宮内勇『一九三〇年代日本共産党私史』（一九七六年一〇月、三一

書房、一五六―一五九頁）

- (8) 大山峻峰「あのとき、あの頃」（『夕刊三重』、一九六八年四月二二日）
- (9) 高橋春雄作製「島木健作年譜」（『日本現代文学全集』第八〇巻、一九六二年一〇月、講談社 および「自作年譜」（『新日本文学全集』第一九巻、一九四二年、改造社）
- (10)、前掲（8）と同じ。
- (11) 「文学界」同人座談会（一九三六年二月、一五三頁）
- (12) 宮井進一「島木健作と私 党および農民運動を背景として」（『現代文学序説』第四号、一九六六年五月）
- (13) 「長編小説」（『文学界』、一九三六年三月）
- (14)、前掲（9）と同じ。
- (15) 「仕事のことその他」（『文学界』、一九三六年八月）
- (16)、前掲（9）と同じ。
- (17)、前掲（6）と同じ。
- (18) 同様の指摘は座談会「新文学のために」（『行動』一九三五年八月）にも見られる。
- (19) 大島清編『日本農民運動史』（一九六一年四月、東洋経済新報社、六五〇頁）
- (20)、前掲（12）と同じ。
- (21) 小笠原克『島木健作』（一九六五年一〇月、明治書院、九頁）
- (22) 大久保典夫「ある転向作家の肖像―島木健作『再建』をめぐる―」（『批評』第一一号、一九六一年四月、森山重雄「島木健作の転向

—『解党派に同調』説批判—『日本文学始原から現代へ』、一九七八年九月、笠間書院

(23)、前掲(12)と同じ。

(24)『転向文学論ノオト』(『現代文学序説』創刊号、一九六二年一〇月、九頁)

(25)窪川鶴次郎「島木健作論」(『文芸』、一九三八年一〇月)「続・島木健作論」(同誌、同年一月)

(26)「島木健作の転向小説」(『都大論究』第三号、一九七六年四月、一六頁)

(27)新たに発見されたスクラップブックに貼付されていた梅川作品を以下、発表年次順に列挙する。

一九三四年

冬目銀之助(随筆欄)「松阪にあそんで」(一)、「伊勢新聞」一一・一七、(学芸欄)評論「ぶろぐれ荘放言録 図太い広告」(二)、「伊勢新聞」不明。

一九三五年

冬目枕水(文芸欄)評論「ぶろぐれ荘放言録」(『伊勢新聞』九・一五、(文芸欄)評論「山梨半造とムツソリーニ」(二)、「伊勢新聞」不明)。

ぶろぐれ荘主人(漫筆)評論「罌堂と石川啄木」(『南勢新聞』一一・

一二)、(漫筆欄)評論「落花生の炙り出し」「アナの検挙」「疑獄時代と川柳」「五・一五事件被釈放者の悲憤」「指で歌む罌堂」「心中者の友人」「銭湯の時間と客色」「日記は史料なり」「若き文芸家の使命」

(『南勢新聞』不明)

一九三六年

堀坂山行(文芸欄)詩「財布」(『伊勢新聞』一・四)、(文芸欄)詩「政談演説会」(『伊勢新聞』一〇・七)、(文芸欄)詩「先生の恋愛は失業であつた」(『伊勢新聞』一二・二三)

一九三七年

堀坂山行(文芸)詩「幼児の論理」(『伊勢新聞』九・一五)

「おにし・やすみつ 本学教員」